

11月9日（日）サムエル記第一7章11, 12節

「サムエルは一つの石を取り、ミツパとエシェンの間に置き、それにエベン・エゼルという名をつけ、「ここまで主が私たちを助けてくださった。」と言った。」（12節）

10節を見ますと、主は御力をもってペリシテの上に大きな雷鳴をとどろかせ、彼らをかき乱されました。それと同時に、イスラエルにはペリシテをさらに追撃することが求められていました。主のみわざは、主が御力を現わされるとともに、人の側でなすべきことが果たされる時に完結され、すべて成し遂げられることを思わされます。もちろん神様の働きだけで、みわざを完成させることは十分可能です。神様は私たちの助けがなければみわざをなさることができないなどということはありません。むしろ、主は人を用いてご自分のみわざを成し遂げようとすることをみこころとしておられるのです。主によって私たちが用いられることは、主が与えてくださる恵みなのです。

エリ以来ペリシテ人との戦いで初めて勝利したことについてサムエルは一つの石を取ってミツパとエシェンの間に置き、それをエベン・エゼルと名づけて記念としました。エベン・エゼルとは「助けの石」との意味がありますが、それは「ここまで主が私たちを助けてくださった」とその意味を解説しています。ここでは決して自分たちの勝利を誇るのではなく、主の助けを強調しています。それは、主の助けがなければ、イスラエルは決してペリシテに勝利することができなかつたからです。ここに、すべての栄光を主に帰しているイスラエルの民の謙遜さが現れています。それとともに、「ここまで主が私たちを助けてくださった」ということは、これからも主が私たちを助けてくださることを期待している信仰の現れと取ることもできます。そのためには、今回と同様、イスラエルの民が主に立ち返り、主に心に向け、主にのみ仕える信仰の姿勢が求められています。

11月10日（月）サムエル記第一7章13, 14節

「ペリシテ人は征服され、二度とイスラエルの領土に入って来なかつた。サムエルの時代を通して、主の手がペリシテ人の上にのしかかつていた。」（13節）

「ペリシテ人は征服され、二度とイスラエルの領土に入って来なかつた。」とありますが、イスラエルがペリシテに対して完全な勝利を治めただけではなく、その後ペリシテが領土に攻め入ることがなく、そこには平和が常にあったことを意味しています。その理由は、「主の手がペリシテ人の上にのしかかつていた。」とありますように、主によってペリシテの侵略が妨げられ

ていたからです。それと同時に「そのころ、イスラエルとアモリ人の間には平和があった」とあります。アモリ人とはカナン地域にもともと住んでいた人たちです。つまり、外敵であるペリシテが攻めて来ることもなく、また土着民であったアモリ人とも平和な関係を築くことで、外においても内においてもイスラエルは平和な状況を維持することができていたということです。私たちは、日々の信仰の歩みの中で平和を維持することは難しいかもしれませんが。しかし私たちの意識しないところであって、主は常に周りとの関係において、ご自身の御手をもって私たちに平和を保ってくださいていることに感謝しましょう。それとともに、私たちの内面においてしばしば平和が乱されます。恐れ、不安、思い煩い、絶望など、いろいろなものが私たちから平和を奪います。しかし、主によって私たちは内側の平和も保つことができるのは感謝です。なぜなら主がそのようなものから私たちの心をも守ってくださるからです。

私たちは、主がおられるので日々平和のうちに歩めていることに感謝をするとともに、主を離れては平安がないことをおぼえて、常に主に立ち返る信仰を持たせていただきましょう。

11月11日(火) サムエル記第一7章15～17節

「サムエルは、一生の間、イスラエルをさばいた。」(15節)

サムエルは、一生の間、イスラエルをさばきつかさとしてさばきました。16節では、さばきの務めを果たした地名が記されています。まず一つ目がベテルで、サムエル記ではここで初めて出てまいります。ここは、ヤコブが神からそこに住み、祭壇を築くようにと言われた場所で、「神が自分と語られたその場所をベテルと名づけた。」とあります。(創世記35章15節) また一時神の箱が安置されていた時期もあり(士師記20章27節参照) この地は聖なる地とみなされていたのでしょう。次のギルガルは、正確な位置は分かりませんが、ヨシュアとイスラエルの民がヨルダン川を渡った時に、ギルガルに宿営し、ヨルダン川から取った十二の石を積み上げて、記念としたことが記されています。(ヨシュア記4章19～24節) この後の王政導入において、しばしば重要な出来事が繰り広げられます。ミツパは、全イスラエルが集められ、サムエルが神に祈りをささげたことにより、ペリシテに勝利した場所です。それぞれが、信仰において重要な意味を持っているという意味で、聖所と呼ばれているのかもしれませんが。そして、巡回した後は、自分の家のあるラマに帰りました。

「サムエルは、一生の間、イスラエルをさばいた。」との一文で、サムエルの生涯がまとめられています。私たちの人生も、ごく短いものです。その中であって、私たちは、ただ主のためになしたことだけが残ります。主のために忠実に自分のなすべき務めを果させていただきたいと

思わされます。また「彼はそこに主のために祭壇を築いた」とありますが、サムエルは日々の主に対する礼拝と主との交わりを欠かすことなく、その務めを果しました。私たちも、主との交わりを絶やさない歩みから、主に対する忠実な務めがなされます。何をするかよりも、まず主への礼拝と主との交わりがなされていますか。

11月12日(水) サムエル記第一8章1～3節

「しかし、この息子たちは父の道に歩まず、利得を追い求め、賄賂を受け取り、さばきを曲げていた。」(3節)

1節で「サムエルは、年老いたとき」と、サムエルが年老いた時のことが特筆されています。「息子たちをイスラエルのさばきつかさとして任命した。」とありますが、これは大きな過ちです。そもそもさばきつかさは、世襲のようなかたちでなされるものではありません。むしろ、神からの召しによる任命を待たなければなりません。そのさばきつかさに任命されたヨエルとアビヤという二人の息子たちは、「父の道に歩まず、利得を追い求め、賄賂を受け取り、さばきを曲げ」るようなことをしていました。彼らは、決して父サムエルの正しい道にならうことがありませんでした。多くの人がサムエルの子育ての失敗と申しましょうか、信仰継承の難しさを語ります。それでは、どこに問題があったのでしょうか。それは、召しもない息子たちをさばきつかさの職に任じたことにも現れています。本来であれば、子どもたちの将来がどうなったとしても、神の召しがない者たちをさばきつかさにすべきではなかったということです。ここから見ても、子育てに関しては主のみこころと合致していなかったということなのでしょう。子育ては常にみことばと祈りをもって神のみこころと一つになるかたちで行われなければなりません。それと同時に、召しのない働きは、必ず神のみこころから逸れていくこととなります。ですから、仕事であっても何でも何かを始める前には必ず祈って神の召しから来るみこころを確認してから始めるべきです。あわてて何かを始めても、それが神の祝福につながると限りません。

11月13日(木) サムエル記第一8章4, 5節

「ご覧ください。あなたはお年を召し、ご子息たちはあなたの道を歩んでいません。どうか今、ほかのすべての国民のように、私たちをさばく王を立ててください。」(5節)

イスラエルの長老たちは、ラマにいるサムエルのところにやって来ました。長老たちとは各

部族の代表者たちです。5節で彼らはサムエルに対してまず問題提起から始めます。一つ目がサムエル自身が年を取っていること、二つ目が息子たちが父の道に歩いていないということです。仮にサムエルの息子たちが父の道を歩んでいたなら、民が王を求めることもなかったかもしれませんし、そうなりますとイスラエルもずいぶん違った国になっていたかもしれません。信仰継承がうまくなされなかったことによって民に王政を望む言質を与えることとなってしまいました。さまざまな意味で信仰継承がいかに大切かをあらためて教えられます。

民は「私たちがさばく王を立ててください。」と王政への転換を訴えます。そして、なぜ彼らが自分たちの王を願ったかと申しますと、「ほかのすべての国民のように」ということです。自分たちもほかのすべての国民のようになりたいということです。イスラエルは、主なる神ご自身が直接治める国でした。まさに主が「あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる」（出エジプト記 19 章 6 節）と言われているとおりです。ですから王政は、そこからの転換でした。私たちも、神を自らの主とし、神に従う歩みを始めてみたものの、どこかでほかの人々のような歩みをしたいとの誘惑に駆られることがあるかもしれません。しかし、そのような時こそ主が私たちに救いへと導いてくださり、主の民としてともに歩むことができていることは、いかに大きな恵みであるかを決して忘れないようにしたいものです。

11月14日（金）サムエル記第一8章6節

「彼らが、「私たちがさばく王を私たちに与えてください」と言ったとき、そのことばはサムエルの目には悪しきことであつた。それでサムエルは主に祈つた。」

「そのことばはサムエルの目には悪しきことであつた。」とありますが、サムエルの目に悪しきこととは、神がイスラエルを治め、イスラエルをさばくという神政政治を拒み、ほかのすべての国民のようになりたいと自分たちをさばく王を求めたことを指しています。ほかのすべての国民のようになりたいとの理由で、自分たちをさばく王を求めるということは、サムエルには受け入れられないことでした。ですから、神が治める現在の体制を維持することが主のみこころだと言いたかったのかもしれませんが、「あなたはお年を召し」と自分が高齢になっていることと「ご息たちはあなたの道を歩いていません」と、自分の子どもたちの悪しき行いを指摘されたなら何も言えなかったのではと思います。そのよう中でサムエルは、主に祈りました。もちろんイスラエルの長老たちが要求したほかのすべての国民のように、自分たちをさばく王を立てることがみこころにかなうかどうかについても祈ったとは思いますが、自分の年齢のことや罪を重ねている息子たちのことで、長老たちに何も言うことができない思いなども含めて

サムエルは主に祈ったことでしょう。私たちは、言われたことが自分の目には悪しきことであれば、それがなぜ主のみこころにかなわないのか、もしくは何が問題なのかということを中心に説明し、説得しようとするでしょう。しかしイスラエルの長老たちのように何か問題になっていることを持ち出されることもあり、それが時には個人への攻撃に発展してしまう可能性があります。むしろ大切なことは、まず主の御前に出て祈ることです。主は、すべてを最善に導き、なすべきことと語るべきことを適切に教えてくださいます。

11月15日（土）サムエル記第一8章7～9節

「民があなたに言うことは何であれ、それを聞き入れよ。なぜなら彼らは、あなたを拒んだのではなく、わたしが王として彼らを治めることを拒んだのだから。」（7節）

「民があなたに言うことは何であれ、それを聞き入れよ。」と主は言われました。これは、イスラエルの長老たちの言ったことがサムエルの意に反して主のみこころにかなったということではなく、主は仕方なくそれを認めたということです。ここで主が言っているように、人の王を立てて自分たちを治めさせるということは、主が王として治めることを拒むことになります。そして、その責任をイスラエルの民全体が負うこととなります。主は、ご自分のみこころにかなわないことであっても、あえてそれを許されることがあります。しかし、主を拒んで、主のみこころにかなわないことをしたことの責任は自分が負わなければならないのです。主に従うなら、すべての責任は主が負ってくださるので、平安でいられるのとは大きな違いです。

8節にありますように、主の恵みとあわれみによってエジプトを出て、荒野での旅も守られ、カナンに入るまで主が守ってくださったにもかかわらず、人々は主を捨てて偶像の神々を拜んでいました。ですから、王政を望むのも決してサムエルと彼の息子たちのせいということではなく、むしろ他の国々のようにになりたいという主を捨てた罪の結果としての求めだったです。主は、そのこともすべてご存じだったのです。

7節で「民があなたに言うことは何であれ、それを聞き入れよ。」と言われましたが、9節でも「今、彼らの声を聞き入れよ」と言われます。「ただし、彼らに自分たちを治める王の権利をはっきりと宣言せよ」と言われます。つまり、5節では自分たちをさばく王を立ててくださいと要求していますが、実際に王が立てられますと、その王は人々をさばく王ではなく、人々の上に權威をふるって人々を治める王となります。そのようにして自分たちが選び取った結果を自分たちが刈り取ることとなります。これは、聖書の大原則です。ですから、私たちは自分の選択や行動の結果も考えて、祈りつつ慎重に行動すべきなのです。